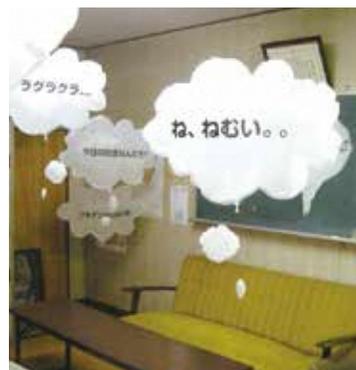




小坂橋慶子「秋のコエ、冬のアシオト」

インスタレーション／旧当尾保育所

不要品が詰め込んであった保育所の大掃除から始まった。カーテンを洗濯し染め直しもした。繭を染め煮てひとつひとつ広げていく。細かい気の遠くなるような作業の末に待っていたのは、夕陽で黄金色に染まった神々しい世界。言葉にならない感動であった。



小原一洋「shimi-project kizugawa」

インスタレーション／理科室

Ｔシャツに模様をつけるワークショップによってシミがついた雑巾、それを理科室に展示していくというもの。観客を巻き込みながら進めていったシミ・プロジェクト 2012。雑巾はあらかじめスタッフや市民に呼びかけて 110 枚が集まった。

松村忠寿「フキだし project in 木津川」

インスタレーションプロジェクト／当尾公民館1階

「牛乳を拭いた雑巾は洗っても臭い」「バナナはおやつにはいりませんか」「また転校かあ」「オクラホマミキサー」。小学校というテーマでみんながつぶやく。ツイッター時代において、みんな天才的なコピーライターだ。作家は今年新たに白いバルーンに挑戦。「言葉」がより鮮明になった。



ミギヒダリよいこ (招待作家)「Grolice」

インスタレーション・パフォーマンスアート／校長室

神経質ほど細部にこだわっていたからこそ、独特の世界観に納得できた。写真集のために生まれたGroliceであったが、いまやその存在自体がコミュニケーションアートの媒体として一人歩きしだした。満面の笑顔、とまどい、警戒、これほど如実に人の感情を引き出すアートとは。





中島和俊「無題」

彫刻／運動場

原色の力強さで〈教育戦隊ペンシルレンジャー〉が校庭を機動する。軽いノリとは対照的に、現代の教育問題に一石を投じるメッセージが随所に掲げられていた。ペンは剣よりも強しと言うが、作家は真剣に鉛筆を振りかざした。



中村岳「遡及空間」

インスタレーション／プール

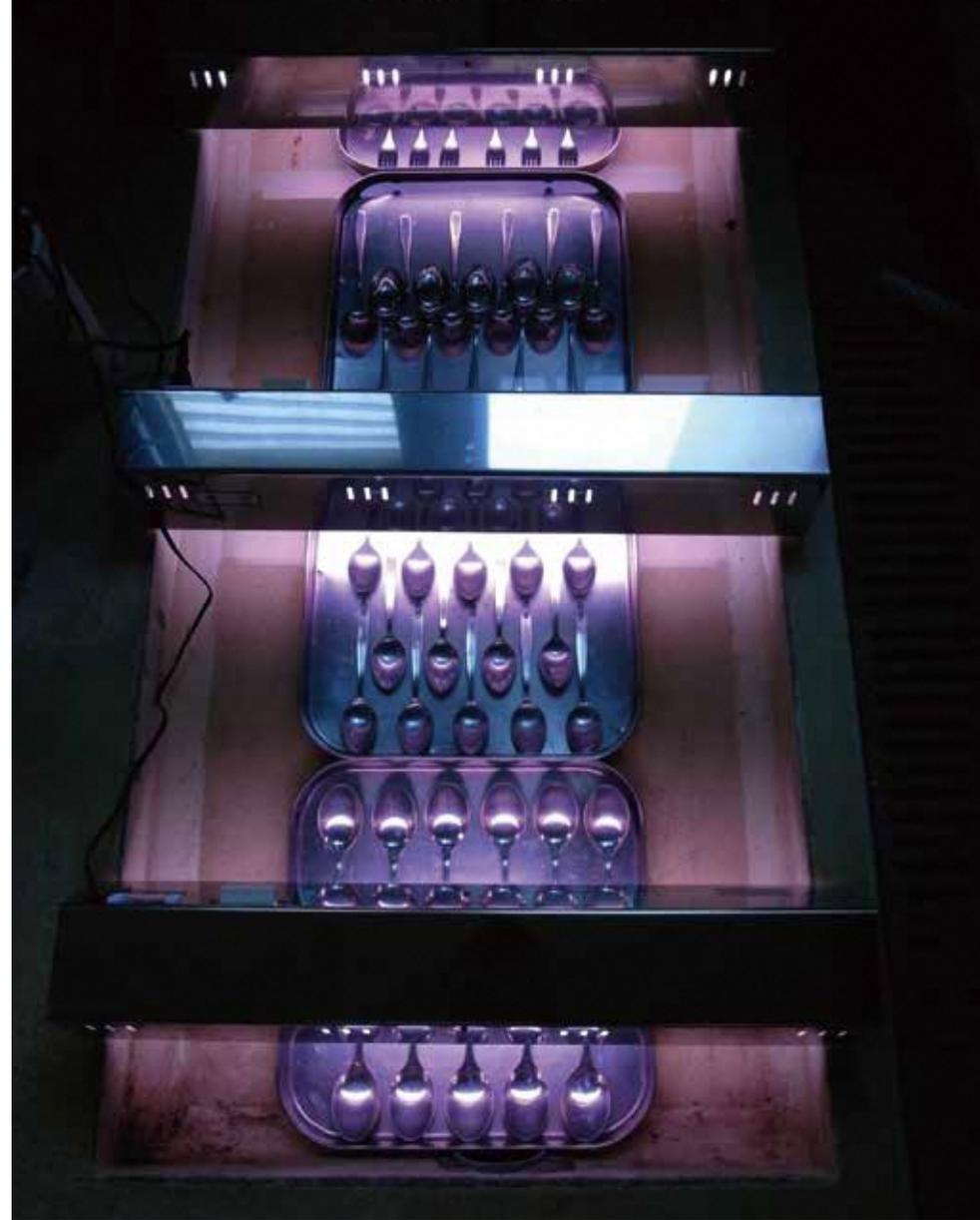
作家の「遡及空間」一連において、水面に関わる作品は初めてだった。イメージした平等院鳳凰堂は日本庭園史初期の代表であり、浄瑠璃寺は同時代の庭園である。



奥本陽一「けんけんぱと不自然な落葉」

コミュニケーションアート／玄関前

気づいた人は、自然とけんけんぱをして校舎に入っていく。おばあちゃんが突然飛んだ。おじいちゃんが突然飛んだ。歓声が起こった。愛嬌のあるその空間と時間が、作家の描いた作品であった。



川中政宏「In the School」

インスタレーション／調理室

薄暗い空間にメトロノームの音が響く。一見調理室、でも何かおかしい。注意深く冷蔵庫を開けたり鍋をのぞけば、小学校の備品を用いた作品が次々と現れてくる。そうしていつのまにか作家の作り出す世界観に、静かに引き込まれていった。





コニシマキコ「記憶の断片」

絵画／廊下壁面

夏から秋の「当尾」風景を描いたという。何度も現地
足を運び、澄んだ空気、もやった空、輝く山などの印象
を断片的につなぎ合わせた作品となった。段々と近づ
いて見えるようにと、廊下突き当たりのこの場所を選
んだ。



井口智広「脳内世界」

オブジェ／トイレ

錆びた釘を表現方法の材料とする作家が、男子トイレ
を選んだ。トイレでの緩んだ時間とシュールなオブ
ジェが重なったとき、何を妄想するのか。したのか。



水島太郎「原点」

彫刻／体育館ステージ

体育館ステージの重厚な緞帳(どんちょう)をフレームにして、作品は物語になり、照明によってドラマチックになった。深い海の底か、遠い昔に見た夢の中か…。中が空洞になっている「脱乾漆」という古来の技法による作品。



少年少女科学クラブ(招待作家) 「彼女は最後の記憶のために共感しました。」

インスタレーション／西階段

モノローグのように、つぶやくように、音叉が階段中に共鳴する。小学校に含まれる記憶まで巻き込んで。そのあとに訪れる静寂の間(ま)もまた心地よい。木津川アート 2011 の作品の「蛾」数匹が、階段天井に仕掛けられていた。作家のほんの遊び心である。





大田高充「背景のためのバックヤード」

インスタレーション／室外機のあるバルコニー

薄いプラスチックの羽が、風によってせわしく動く。作者は入ってはいけないこの場所にこだわった。室外機の向こう側、子供の心が危なっかしくも楽しげに見え隠れするのを、窓から見下ろしていた。



36



藤友陽子「風景」

銅版画／理科準備室

作家の版画が、これほど理科準備室に似合うとは。最高に楽しい化学反応が起こった。無口な少年の饒舌なノートをのぞき見たような、そんな午後。



37



北田幸子「朝に夕立。アメフラシ」

ミクストメディア／女子トイレ

女の子はキラキラによわい。女の子はかわいいのにもよわい。キラキラかわいいトイレによっこそ！そう、トイレはいつもきれいにピカピカにしておこうね。



出村実英子「ゆく河の流れは絶えずして」

インスタレーション／多目的室

窓の外のイチヨウや楓の紅葉を考慮して、あえて織らない作品となった。光の当たり具合で浮かび上がったり風景に透かしたり、その妙を楽しんだ。夜のツアーでは思いもよらなかった美しさに遭遇。芥川龍之介の「蜘蛛の糸」を思い出した。



加藤史江「咲かせよう~growing up~」

墨と紙の造形／東階段

墨と和紙の妖精が跳ねたり転がったり。それは階段を上るごとにふくらんでいく作家の遊び心。最上階の踊り場で大きな花が出迎えてくれた。



小谷茉莉「ゆめのつづき」

インスタレーション／5組

木津川アート2011に登場した夢の中の怪物は、2012会期中に増殖し続けた。トラウマを植え付けさせるという作家の目論見とは裏腹に、観客が感想ノートに残した怪物のスケッチは、とぼけていてかわいい。たのしい思い出をたくさん残したようだ。



中尾めぐみ「ざわめき」

油彩／倉庫3階

窓のない変形の倉庫をアトリエとし、そのまま展示スペースになった。「集中できる」と夜ごと通いながら完成させた。作家は当尾が好きになり、住みたいと希望している。作品はその後はがき大にカットして、芳名録に感想を書いてくださった方々100名にお礼を送ったという。プロセスから後始末までが作品と呼べるだろう。



玉野由理「Private Garden」

絵画／配膳室

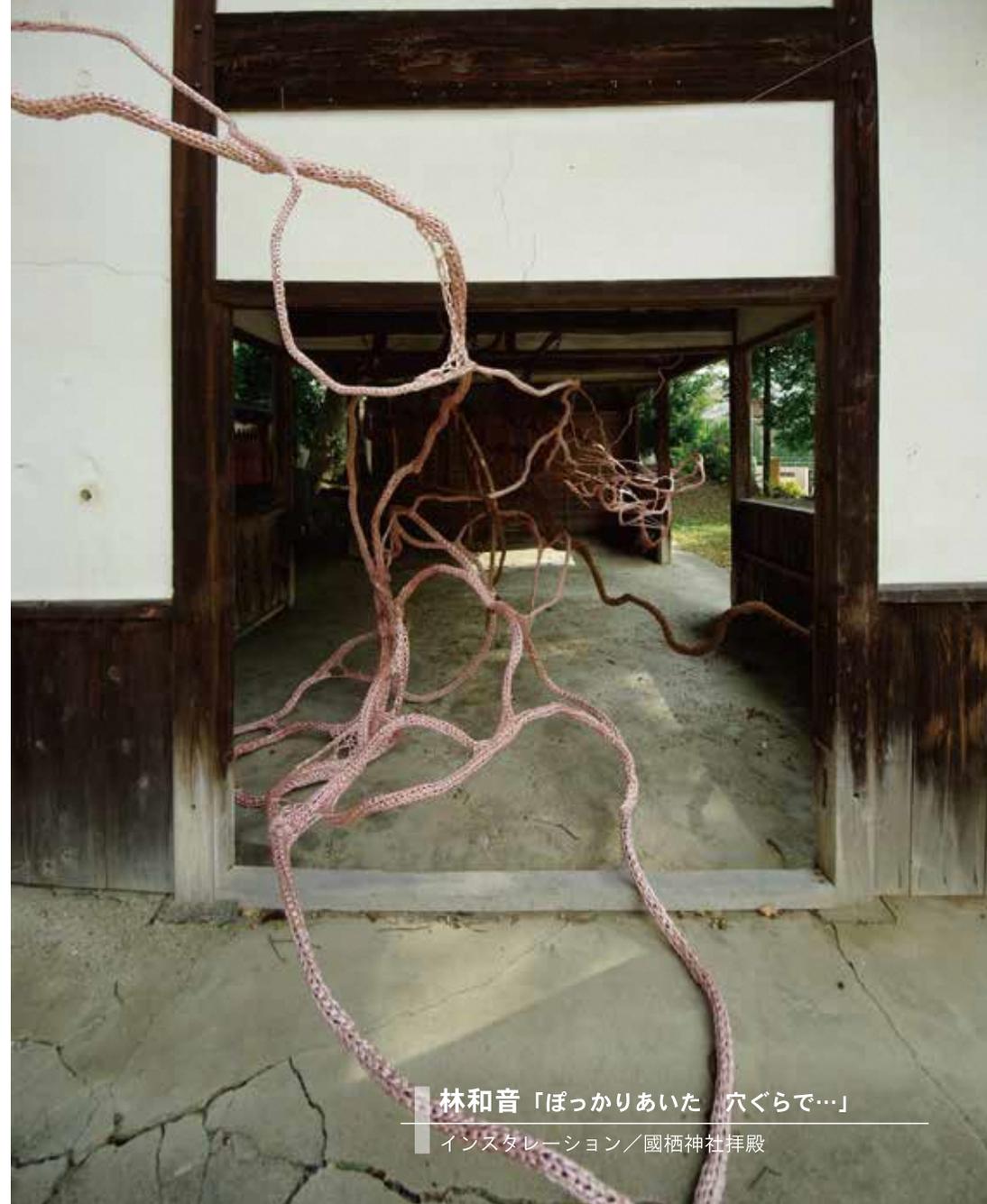
3階の配膳室。作家は窓を開け放し制作していた。10月の心地いい風がスケッチの紙を揺らす。「たのしくてしょうがない」と何度も笑った。下絵のスケッチをそのまま残し展示することにしたのは、ここで過ごした時間そのものが作品だからだ。



SKF3 (櫻井恵子・片平修・藤本達也)「増殖」

インスタレーション／音楽室

覚えやすいメロディ、短い時間に盛り上がりのある音楽構成、思わず木琴やオルガンを演奏してしまったという観客も多かったろう。シルエットの指揮者は、ネットで応じてくださったという高校の音楽教師。木津川の河原での撮影、木津川の水泡なども編集している。ユニットによる舞台と映像の力作であった。



林和音「ぽっかりあいた 穴ぐらで…」

インスタレーション／國栖神社拜殿



周りの枝を巻き込みながら、神社の拜殿を縦横無尽に遊び回っている。勢い余って外まで飛び出してきた。自由を感じる作品だ。夜暗くなってからも制作していた作家に、地元の方が投光器を持って来てくれた。優しさに触れてますます元気に浮遊する。



小川しゅん一「飛び出し坊やたち」

インスタレーション／辻～高去

飛び出し注意を呼びかける看板の顔に、地元の方々の顔を入れさせてもらった。快く撮影を受けてくださったみなさん、ありがとうございました。木津川アート終了後、飛び出し坊やたちは、地元の強い願いを受けて、当尾の交通安全を見守っていくこととなった。



46



47





永田幹「イス」

インスタレーション・家具／農協集荷場となり

当尾小学校を見守り続けてきた國栖（くず）神社。その小さな鎮守の森に、大きな大きな椅子一つ。明治、大正、昭和、平成の小学生たちが、よじ登ったり追いかけっこをしている幻が見えた。



tagiruka「キャンパスとキャンパスと」

インスタレーション／祇園さん

地元でもあまり知られていない社（やしろ）をあえて選んだことに意義を感じる。この閉ざされた小さい空間が、どこか違う星の風景に見えたりした。崩れそうだった鳥居は、木津川アート開催に合わせて新たに建て替えられた。祇園さんに、宇宙に、そして地元の協力で手を合わせたい。



山本茂「gratitude」

写真／当尾公民館2階

木津川アートにとって欠かせない「景観」を、作者は丁寧に拾い上げた。変わらないモノ、変わっていくモノを静かに見つめる時間を与えてくれた。公民館2階の大広間は、はまりすぎるほど居心地のいい空間だった。道路拡張によりなくなってしまう日も近いという。限りがあるから、なおさらいとおいしい。



園川絢也「ギャラフル」

インスタレーション／旧当尾保育所

一見布に見えるのは、実はアクリル絵具を固めたモノ。彼らは夜ごと集まってはいたずらの相談をしたり、あっちこっち飛び跳ねたりした。「せんせい、おしっこ〜」「せんせい、あのね」口々にしゃべる原色の絵の具たちの声が聞こえてくる。



佐藤久一
「CROSS・BEARING Nov.012(Tou)
(1/2 メビウス・渦・紐より)」

彫刻・インスタレーション／ゲートボール場

百歳は越えているであろう柿の木は、この年枯れてしまった。その木の下が作家の希望した展示空間だった。作家は近くの民家に泊めてもらい、当尾の空気を吸いながら制作した。作品は同じ場所に残ることとなった。柿の木がなくなっても、ここで起こったさまざまな思い出として。



中橋祥行「巡り合い散歩」

立体／農具小屋、ゲートボール場など

作家はあえて作品を示す看板をつけなかった。それこそが意図するところだった。当尾の景観を何よりも尊び、散歩する人々の笑顔や驚きを想像しながら制作したにちがいない。小屋の所有者さんとのふれ合いも大事にする方である。



許斐英明「当尾野音博覧会ーかくれんぼの林ー」

サウンドインスタレーション／栗林

当尾でさまざまな音を採取し、鳥や虫の音に聞こえるように加工・編集。栗林のそこかしこから聞こえてくる「当尾野音博覧会」と銘打った。静けさの中で耳を澄ませば、不思議な旅をしているようだ。



長谷川政弘（招待作家）「いつもあるような」

彫刻／高去防火水槽

フェンスと同化する錆びた鉄の色、山の稜線と同化するフォルム。ある日突然出現したオブジェは、昔からいたような顔をしていた。木津川アート終了後、そのままそこに残っていて欲しいと地区の全住民から要望された。日々変わる当尾の空を防火水槽の水面に映しながら、今日も泰然と立つ。



伊吹拓「あなた」

油彩／森八幡宮拝殿

展示した3枚のうち真ん中の抽象画は、わずかに社の方に向けて傾けてあった。森八幡宮を何度も訪れ、その空気を肌で感じた末に、神さまに観て頂く作品へと昇華した。吹き込む雨も枯れ葉もものともしない力強さがあった。



56



北直人「ウルトラミラクルジャーニー」

立体／森八幡宮

森八幡宮の持つ神秘さを感じながらゆっくりまわる。思わぬところに散りばめられた作品に気づき、そして微笑む。観る人それぞれが勝手にストーリーを作ったり、推理したり。そんな夢のある作品だ。



57